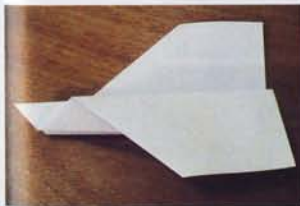




AS A MALL, I REALLY LIKE MoMA FLYING PAPER AIRPLANES (ハナ・レオ) ニューヨーク近代美術館 吹き抜けアトリウム/2006年作品  
 材料：コピー用紙  
 多数の人々にアーティストからEメールで文章が送られた。その文章に共感を覚えた人が、それぞれプリントアウトして紙飛行機を折る。それを美術館に持ち寄り、3月24日午後6時に一斉にMoMAの吹き抜けに放った

Photo by Simon Lund



### Paper Planes, 6pm Sharp

200枚の紙飛行機が、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) の6層吹き抜けのアトリウムを乱舞した。その瞬間、美術館の気息い静けさが警備員の怒鳴り声で一瞬目覚め、リアルな緊張が訪れた。驚いてみんなが集まってくる。観客は、床に落ちた真っ白い紙飛行機を拾い上げる。警備員は、それをさせまいと必死で回収する。2006年3月24日午後6時。MoMAに、柔らかない\*テロ。が勃発した。

スペイン人のアーティスト、ハナからメールが届いたのは前日。「紙飛行機、明日6時。MoMAと一緒に飛ばさない?」。暗号のような謎めいたメッセージだった。半信半疑だったが、思い切って出かけることにした。ちょっと早めに美術館につくと、忙しく走り回っているハナをみつけた。呼びかけると緊張した面もちでこう告げた。「6時きっかりに吹き抜けのアトリウムに来てね」

しばらくしてから、チャイナタウンにあるハナのアトリエを訪ねた。真相を聞いてみると、MoMAで開催されているNew Architecture in Spainという展覧会を見たが、内容がとてつもなく商業主義に傾いて見え、抗議文を書いた。それから、それを紙飛行機にして飛ばすアイデアを得たという。「As a mall, I really like MoMA=ショッピングモールとしてのMoMAは大好き」という皮肉を込めたピラには、ハナ・レオ、プリンストン大学建築学博士と、実名が入っている。勇気があるね、と私が言ったら彼女が喜んだ。「その前日は怖くて眠れなかったの」。

ハナのお父さんは、労働組合の書記長だった。毎日のように警官に殴られてアザをつくって家に戻ってきた。1975年にスペインのフランコ独裁政権が終わるまで、ハナはそんな環境の中で育った。実家でしばしば行われた労働闘争の作戦会議を横目で見ながら、子供ながらにプロテストの方法を学んだ。

「最初はピラにしてMoMAの前で配ろうと思ったの。でも、ピラって、勝手に人々に手渡して強制的に読ませて、暴力的な感じがあってどうも気が進まなかった。紙飛行機だったら拾いたい人が拾って読んでくれるでしょ?」

ハナがひよいと紙飛行機を取り上げて、にっこり微笑んだ。本来、アートは許可されてつくるものではない。彼女の放った飛行機は、暴力ではなく、よどんだ空気にそよ風を運ぶ、一編の美しい詩だった。

JANA LEO=1965年、マドリッド生まれ。ニューヨーク在住。マドリッドにて哲学と美学を学び、Universidad Autónoma de Madridで哲学の博士号を取得。プリンストン大学で建築学科修士課程修了。現在、クーパーユニオン大学で建築論の教鞭を執る。同時にアーティストとして、写真や映像など幅広い分野で活動している。主な著作に、現代文化のサーヴェイを行った「the trip with no distance」がある

万  
物  
流  
転

#002

Paper Planes, 6pm Sharp



白い空に乱舞する、  
意志という名の爆撃機  
優しく、強く、美しく。